

和太郎さんと牛

新美南吉

牛ひきの和太郎さんは、たいへんよい牛をもっていると、みんながいつていました。だが、それはよぼよぼの年とつた牛で、おしりの肉がこけて落ちて、あばら骨も数えられるほどでした。そして、から車をひいてさえ、じきに舌を出して、苦しそうにいきをするのでした。

「こんな牛の、どこがいいものか、和太はばかだ。こんなにならないまえに、売ってしまつて、もつと若い、元氣のいいのを買えばよかったんだ」

と、次郎左エ門じろうざもんさんはいうのでした。次郎左エ門さんは若いころ、東京にいて、新聞の配達夫けいなんをしたり、外国人の宣教師の家で下男げなんをしたりして、さまざま苦勞したすえ、りくつがすきで仕事がきらいになつて村にもどつたという人でありました。

しかし、次郎左エ門さんがそういつても、和太郎さんのよぼよぼ牛は、和太郎さんにとってはたいそうよい牛でありました。

どういうわけなのでしうか。

人間にはだれしもくせがあります。和太郎さんにもひとつ悪いくせがあつて、和太郎さんはそれをいわれ

ると、いつもおそれいって頭をかき、ついでに背^{せなか}中のかゆいところまでかくのですが、それというのはお酒を飲むことでありました。

村から町へいくとちゆう、道ばたに大きい松が一本あり、そのかげに茶店^{ちやみせ}が一軒ありました。ちようどうまいぐあいには、松の木が一本と茶店が一軒ならんであるということが、和太郎さんにはよくなかったのです。というのは、松の木というものは牛をつないでおくによいもので、茶店というものはお酒の好きな人が、ちよつと一服するによいものだからです。

そこで和太郎さんは、そこを通りかかると、つい、

牛を松につないで、ふらふらと茶店にはいつて、ちよつと一服してしまうのでした。

ちよつと一服のつもりで、和太郎さんは茶店にはいるのです。けれど酒を飲んでいるうちに、人間の考えはよくかわってしまうものです。もうちよつと、もうちよつと、と思つて、一時間くらいじきすごしてしまいます。するとちようど日ぐれになりますから、「ま、こうなりや月が出るまで待つていよう。暗い道を帰るよりましだから」と、またすわりなおしてしまします。ほんとうに、そのうち月が^な出ます。野原は菜の花のさいているじぶん^なにしろ、稲の苗のうわったじぶん^なに

しろ、月が出れば、明るくて美しいものです。しかし月が出ても出なくても、もう和太郎さんには、どうでもいいことです。というのは和太郎さんは、そのころまでにひどくよっぱらってしまっているので、目などはつきりあけてはいられないからです。

それがしようこに、和太郎さんは、牛と松の木の、区別がつかないのです。ですから、松の木にまきつけた綱つなをさがすつもりで、牛の腹をいつまでもなでまわしたりします。しかたがないので、茶屋のおよしばあさんが、手綱たづなをといてやります。そのうえおよしばあさんは、小田原おだわらちょうちに火をともして、牛車の台

のうしろにつるしてやります。なにしろ酒飲みは、平気でひとに世話をさせるものです。

和太郎さんは、およしばあさんに世話をさせるばかりではありません。これから牛のお世話になるのです。二、三町も歩くと、和太郎さんは「夜道はこうも遠いものか」と考えはじめるのです。そして手綱を牛の角つのにひっかけておいて、じぶんは車の上にはいあがります。

こうすれば、もう夜道がどんなに遠くても、和太郎さんにはかまわないわけです。ただ、ねむっているあいだに、車からころげ落ちないように、荷をしぼりつ

ける綱を輪にして、じぶんのあごにひっかけておくことを忘れてはいけないのです。

目がさめると、和太郎さんは、じぶんの家の庭にきています。牛がちゃんと道を知っていて、家へもどってきてくれるのです。

こんなことはたびたびありました。いっぺんも、牛は道をまちがえて、和太郎さんを海の方へつれていたり、知らない村の方へひいていったことはなかったのです。

だから和太郎さんにとって、この牛はこんなよぼよぼのみすぼらしい牛ではありませんでしたが、たいへん役に

たつよい牛でありました。もし、次郎左エ門じろうざもんさんのす
すめにしたがって、この牛を売って若い元気な牛とか
えたとしたら、こんど和太郎さんがよつぱらうとき、
どこで目がさめるかわかったものではありません。十
里さきの名古屋なごやの街のまん中で、よいからさめるかも
しれません。それともこの半島のはしの、海にのぞん
だ崖がけつぶちの上で目がさめ、びつくりするようなこと
になるかもしれません。なにしろ若い牛は元気がいい
ので、ひと晩のうちに十里くらいは歩くでしょうから。

「和太郎さんはいい牛を持っている」とみんなはいっ
ていました。「まるで、気がよくきいて親切しんせつなおかみ

さんのような」といつていました。

二

ところで、和太郎さんのおかみさんのことです。

和太郎さんは、おかみさんについて悲しい思い出がありました。

和太郎さんも、若かったとき、ひとなみにお嫁^{よめ}さん
をもらいました。

いままで、年とった目つかちのおかあさんとふたり
きりの、さびしい生活をしていましたので、若いお嫁

さんがくると、和太郎さんの家は、毎日がお祭のように、明るくたのしくなりました。

美しくて、まめまめしく働くお嫁さんなので、和太郎さんも目つかちのおかあさんも、喜んでいました。

けれど、和太郎さんは、ある日、おかしなことに目をつけました。それは、ご飯を家じゅう三人でたべるとき、お嫁さんがいつも、顔を横にむけて壁かべの方を見ていることでありました。

和太郎さんは、十日間それをだまって見ていました。お嫁さんはあいかわらず、壁の方に顔をむけてご飯をたべるのでありました。

とうとう和太郎さんは、がまんができなくなつて、ききました。

「おまえは、首をそういうふうに、ねじむけておかないと、ご飯がのどを通つていけないのかや。それとも、うちの壁に、なにかかわつたことでもあるのかや」するとお嫁さんは、なにもこたえないで、箸はしを持つた手をひざの上においたまま、うつむいてしまいました。

あとでふたりきりになったとき、お嫁さんは小さな声で和太郎さんにつげました。

「わたしは、おかあさんのつぶれたほうの目を見る

と、気持ちが変わるのです。つぶれて、赤い肉が見えているでしょう。あれを見てはご飯がのどを通らないので、横をむいているのです」

「そうか、だがおかあさんは、遊んでいて目をつぶしたのじゃないぞや。田の草をとって、稲の葉先でついたのがもとで、あの目をつぶしたのだぞや」と、和太郎さんはいいました。

「わたしは、こういうもんか、あのつぶれた目の赤い肉の色を見ると、気持ちが変わるのです」
と、お嫁さんはまたいうのでした。

「だが、おかあさんは、稲について目をつぶしたの

だぞや。そんなにして、わしをぞだててくれたのだぞや」

「でも、わたしは、あのつぶれた目を見ていては、ご飯がのどを通りません」

和太郎さんはおかあさんとふたりきりになったとき、おかあさんに話しました。

「おチヨは、おかあさんのつぶれたほうの目を見てみると、気持ちかわるくて、ご飯がのどを通らんそうです」

それを聞くと、年とったおかあさんは、豆をたたくのをやめて、しばらく悲しげな顔をしていました。そ

していいました。

「そりや、もつともじや。こんなかたわを見ていちや、若いものには気持ちがよくあるまい。わしはまえから、嫁ごがきたら、おまえたちのじやまにならぬように、どこかへ奉公に出ようと思つていたのだよ。それじや、あしたから榊半さんますはんのところへ奉公にいこう。あそこじや飯たきばあさんがほしいそうだから」

つぎの日、年とつたおかあさんは、すこしの荷物をふろしき包みにして、日ざかりにこうもりがさをさして家を出ていきました。門先かどさきのもえるようにさきさかつているつつじのあいだを通つて、いつてしまいま

した。

畑の垣根^{かきね}をなおしながら、和太郎さんは、おかあさんを見送っていました。おかあさんが見えなくなると、つつじの赤が、和太郎さんの目にしみました。

和太郎さんはなくてきました。こんな年とったおかあさんを、今また奉公させに、よその家にやってよいものでしょうか。せつせと働いて、苦勞をしつづけて、ひとり息子^{むすこ}の和太郎さんをそだててくれたおかあさんを。

和太郎さんは縄^{なわ}きれを持ったまま、とんでいって、おかあさんの手をつかむと、だまってぐんぐん家へ

ひっぱってきました。

「おい、おい、おチヨ」

と、和太郎さんはよびました。

お嫁さんは台所から、手をふきながら、出てきました。

「おまえは、近いうちにさ、へいつぺん帰りたい用があるといっていたな」

「はい」

「それじゃ、きょう、いまからいきなさい」

お嫁さんは、じぶんの生まれた家に久しぶりに帰ることができるので、うれしくてたまりませんでした。

さつそくよい着物にかえました。

「さとはは、たけのこがなかったな。たけのこを持っていきなさい。ふきもたくさん持っていきなさい」

と、和太郎さんはいいました。

お嫁さんはたくさんのおみやげをかかえこんで、戸口を出ていいました。

「それじゃ、いつてまいります」

「ああいけや」と和太郎さんはいいました。

「そうして、もう、ここへこなくてもよいぞや」

お嫁さんはびっくりしました。しかしいくらお嫁さんがびっくりしたところで、和太郎さんの心は、もう

かわりませんでした。

こうして、和太郎さんはお嫁さんとわかれてしまいました。

そののち、あちこちから、お嫁さんの話がありました。が、和太郎さんはもうもらいませんでした。ときどき、もういつペンもらってみようか、と思うこともありました。が、壁を見ると、「やっぱり、よそう」と、考えがかわるのです。

しかし、お嫁さんをもらわない和太郎さんは、ひとつ残念なざんねんことがありました。それは子どもがないということです。

おかあさんは年をとって、だんだん小さくなつていきます。和太郎さんも、今は男ざかりですが、やがておじいさんになつてしまうのです。牛もそのうちには、もつとしりがやせ、あばら骨がろくぼくのようにならわれ、ついには死ぬのです。そうすると、和太郎さんの家はほろびてしまいます。

お嫁さんはいらないが、子どもがほしい、とよく和太郎さんは考えるのであります。

人間はほかの人間からお世話になるとお礼をします。けれど、牛や馬からお世話になったときには、あまりいたしません。お礼をしなくても、牛や馬は、べつだん文句をいわないからであります。だが、これは不公平な、いけないやり方である、と和太郎さんは思っていました。なにか、よぼよぼの牛のたいそう喜ぶようなことをして、日ごろお世話になっているお礼にしたものだ、と考えていました。

すると、そういうよいおりがやってきました。

ひやくしやう
百姓ばかりの村には、ほんとうに平和な、金色の
こんじき
夕ぐれをめぐまれることがあります。それは、そん

な春の夕ぐれでありました。出そろって、山羊やぎ小屋の窓をかくしている大麦の穂の上に、やわらかに夕日の光が流れておりました。

和太郎さんは、よぼよぼ牛に車をひかせて、町へいくとちゆうでした。

和太郎さんは、いつもきげんがいいのですが、きょうはまたいちだんとはれやかな顔をしていました。酒さかだるをつんでいたからであります。

酒だるを、となり村の酒屋から、町の酢屋すやまで、とどけるようにたのまれたのです。その中には、お酒の**お**りがつまっていました。お**り**というのは、お酒をつ

くるとき、たるのそこにたまる、乳色のにごったものであります。

酒だるはゆれるたびに、どぼオン、どぼオン、と重たい音をたてました。そしてしずかな百姓の村の日ぐれに、お酒のにおいをふりまいていきました。

和太郎さんは、はれやかな顔をしながら、いつもこういう荷物をたのめたいものだ、音を聞いているだけだし、やばの苦しみを忘れる、などと考えていました。するととつぜん、ほんと音がしました。

見ると、ひとつのたるのかがみ板が、とんでしまい、ちようど車が坂にかかって、かたむいていたので、白

いおりが滝たきのように流れ出していました。

「こりや、こりや」

と和太郎さんはいいましたが、もうどうしようもありませんでした。おりは地面にこぼれ、くぼんだところにたまつて、いつそうぶんぷんとよいにおいをさせました。

においをかいで、酒ずきの百姓や、年よりがあつまつてきました。村のはずれに住んでいる、おトキばあさんまでやってきたところを見ると、おりのにおいは、五町も流れていったにちがいありません。

みんながあつまつてきたとき、和太郎さんは車のま

わりをうろろしていました。

「こりや、おれの罪じゃない。おりというやつは、
ゆすられるとふえるもんだ。^{ぎゅうしや}牛車でごとごとゆすられてくるうちに、ふえたんだ。それに、このぬくとい
陽気だから、よけいふえたんだ」

と和太郎さんは、^{だんな}旦那にするいいわけを、村の人びと
にむかつていいました。

「そうだ、そうだ」

と人びとはあいづちをうちながら、道にたまった、た
くさんのおり、をながめて、のどをならしました。

「さて、こりや、どうしたものでい。ほつときや土

がすつてしまおうが」

と、年とった百姓がわらすべをおりにひたしては、しゃぶりながらいいました。

ほんとに、ほつとけば土がすつてしまふ、とみんなが思いました。そのとき和太郎さんがいいことを思いついたのでした。

和太郎さんは、牛をくびきからはなしました。そして、こぼれたおりのところにつれていきました。

「そら、なめろ」

牛は、おりの上に首をさげて、しばらくじつとしていました。それは、においをかいで、これはうまいも

のかまずいものか、と判断しているように見えました。見ている百姓たちも、いきをころして、牛は酒を飲むか飲まぬか、と考えていました。

牛は舌を出して、ペロりとひとなめやりました。そしてまたちよつと動かずにいました。口の中でその味をよくしらべているにちがいありません。

見ている百姓たちは、あまりいきをころしていたので、胸が苦しくなったほどでありました。

牛はまた、ペロりとなめました。そしてあとは、ペロリペロりとなめ、おまけに、ふうふうという鼻いきまで加わったので、たいそういそがしくなりました。

「牛というもなア、酒の好きなかものとみえるなア」と村びとのひとりが、ためいきまじりにいいました。

ほかのものは、じぶんが牛でないことをたいそうざんねんに思いました。

和太郎さんは、牛がおいしそうにおりをなめるのを喜んで見ていました。

「おオよ。たべろたべろ。いつもおまえの世話になっておるで、お礼をせにやならんと思っておったのだ。だが、おまえが酒ずきとは知らなかったのだ」

牛はてまえのおりがなくなると、ひと足進んで、むこうのおりをなめました。

「牛てもな、大酒おおざけくらいだなア」

と村びとのひとりが、ほしいもののもらえなかつた子どものように、なげやりにいいました。

「いくらでもええだけたべろ」と和太郎さんは、牛の背せなか中をなでながらいいました。

「ようまでたべろ。よつてもええぞ、きょうはおれが世話してやるで。きょうこそ、一生に一ぺんのご恩がえしだ」

ついに牛は、おりをなめてしまい、土だけが残りしました。もうあたりはうす暗くなっていました。和太郎さんはまた牛をく**び**きにつけました。

青い夕かげが流れて、そこらの垣根かきねの木いちごの花
だけが白くういている道を、腹いっぱいいたべた牛と、
日ごろのご恩をかえしたつもりの和太郎さんが、とも
に満足をおぼえながらのろのろといきました。

四

さて、和太郎さんも、きょうだけはじぶんがお酒を
飲むのをよそうと決心していました。和太郎さんの意
見では、牛が飲んだうえに、牛飼いまでが飲むのは、
だらしないことであつたのです。しかし、それなら

和太郎さんは、帰り道を一本松と茶屋の前にとつてはならなかったのです。すこしまわり道だけれど、焼場やきばの方のさびしい道をいけばよかったのです。

だが、和太郎さんは、なアに、きようはだいじょうぶだ、と思いました。「おれにだつてわきまえというものがあるさ」とひとりごとをいいました。そして一本松と茶屋の前を通りかかりました。

酒飲みの考えは、酒の近くへくると、よくかわるものであります。和太郎さんも、茶屋の前までくると、じぶんの石のようにかたかった決心が、とうふのようにもろくくずれていくのをおぼえました。

じつは和太郎さんも、牛に酒のおり、をなめさせているとき、じぶんも、のどから手が出るほど飲みたかつたのを、おさえていたのです。その欲望が、茶屋の前できゆうに頭をもちあげてきました。

「ま、ちよつと一服するくらい、いいだろう」

と和太郎さんは、手綱たづなを松の太いみきにまきつけながら、いいました。牛はいつものようにおとなしくしていました。

そして和太郎さんは、茶店に、手をこすりながら、はいつていきました。

いつものとおりでした。もうちよつと、もうちよつ

とといっているうちに、時間は過ぎていきました。
徳利とっくりの数もふえていきました。

茶屋のおよしばあさんが、いろいろ和太郎さんの世話をやいて、松から手綱をといてくれたり、小田原おだわらちようちに火をともしてくれたのも、いつものとおりでした。

ただ、牛が地べたの上にねそべっていたことだけが、いつもとちがっていました。およしばあさんは、そうとは知らなかったので、もうすこしで牛につまずくところでした。和太郎さんは、

「坊よ、起きろ」

と、いいました。

牛は、ふううつと太い長い鼻いきでこたえたただけで、起きようとしませんでした。

「坊よ、腹でもいてえか。起きろ」

といって、和太郎さんは、手綱でぐいつとひっぱりました。

牛はのろのろと、ものうげにからだを動かして、ま
ずしりのほうを起こしました。前あしはふたつにおつ
て地についたままでしばらくいて、大きい鼻いきをた
てつづけにするのでした。

「あら、いやだよ。この牛は。かじやのふいごのよ

うに、ふうふう、いうんだもの」

と、およしばあさんはいいました。

「まるで、よいどれみたいだよ」

そのことばで、和太郎さんは、ようやく牛もたくさん飲んだことを思い出しました。そこでおかしくなつて、げらげらわらつていいいました。

「それにちげえねえ」

やつとのことで牛が前あしを立てると、和太郎さんはいよいよ家にむかつて出発しました。

いつも茶屋のおよしばあさんは、和太郎さんが出発してから、かなり長いあいだ、和太郎さんの車の輪が

なわて、道の上にたてる、からからという音を聞いたものでした。それが、その日は、じききこえなくなつてしまいました。へんだとは思いましたが、ばあさんは、あまり気にもとめませんでした。なにしろ、牛飼いと牛と両方がよつぱらつているのですから、どこへいくのやら、なにをするのやら、わかつたもんじやないからです。

五

和太郎さんの年とつたおかあさんは、ぶいぶいと糸

くり車をまわしては、かた目で柱時計を見あげ見あげ、
夜おそくまで待つていました。

そのうちに、年とつてすすびた柱時計は、しばらく
ぜいぜいと、ぜんそく持ちのおじいさんのようにのど
をならしていてから、長いあいだかかつて、十一時を
打ったのでありました。

いつも十一時が打つころには、外に車の音がきつと
してくるのです。今夜はどうしたことだろう、とお
かあさんは思いました。

十分すぎました。まだ車の音が聞こえてきません。
おかあさんは心配になって、ひざから綿くずをはらい

落としながら、門口に出てみました。

よい月夜で、ねしずまった家いへの屋根の瓦が、ぬれて光っていました。道はほのじろくうかびあがり、遠くまで見えていました。けれど遠くには和太郎さんの車のかげはありませんでした。

和太郎さんが夜、家に帰らなかったことといえば、いままでに、ほんのかぞえるほどこありませんでした。おかあさんは、どんなときに和太郎さんがよそでとまったか、ちゃんとおぼえていました。和太郎さんが小学生だったころ、学校から伊勢参宮いせさんぐうをしたときふた晩、それから和太郎さんが若い衆であつたころ、

よしのやま

吉野山へ村の若い者たちといっしょにいったときが五
晩、そしてやはり若い衆であつたころ、毎年村の祭の
夜ひと晩ずつ山車だしの夜番をしにいったものでした。そ
のほか、和太郎さんが、家をあけてよそでとまつて
きたことは、一ぺんもなかったのです。そこでおかあ
さんは、だんだん心配になつてきました。

十一時が二十分たちました。まだ和太郎さんは歸つ
てきません。おかあさんはとうとう決心しました。
駐在所ちゆうざいしょのおまわりさんのところへ相談にいったので
した。

おまわりさんの芝田しばたさんは、なにか事件でも起こつ

たかと、電燈の下であわてて黒いズボンをはき、サーベルを腰につるしながら下りてきました。

しかし芝田さんは、話を聞いて、すこしはりあいがぬけました。

「そりや、また和太さんが一ぱいやつたんだろう」といいました。

「ンでも、こげなこと、一ぺんもごぜえませんもの。あれにかぎって、いくらよつておつても、十一時にはちゃんと帰ってきますだかのイ」

と、和太郎さんのおかあさんはいいました。そして、十一時が二十分すぎてもまだ帰ってこないのは、きつ

と、とちゅうでおい、はぎにでもつかまったにちがいないといいはるのであります。

芝田^{しばた}さんは、このおさまった御代^{みよ}に、おい、はぎ、など

が、やたらにいるものではないことをきかせました。和太郎さんが、いつもじぶんは正体もなくよって、牛にひかれて帰ってくるのだから、今夜は、牛がなにかのぐあい^{ぐあい}で二、三十分おくれたのだろう、なにしろ牛などというものは、あまり時間の正確な動物ではないから、ともいうのでした。

けれど和太郎さんのおかあさんは、じぶんの考えをいつまでもいいはるので、芝田^{しばた}さんもうとうとう根^{こん}負け

してしまつて、

「よし、それでは、そうさくすることにしよう」といいました。

いつも事件が起こったときには、村の青年団が駐在巡査の応援をすることになっていましたので、芝田さんは青年団の人びとにあつまってもらいました。まもなく青年団員は制服を着てゲートルをまいて、ぼうきれを持ってよつてきました。青年団員ばかりでなく、ほかのおとなや、腰のまがりかかったおじいさんまで、やつてきました。

じつは、このような、夜中に人が消えたというよう

な事件は、この村には、もうなん十年も、なかったの
でした。このまえ、青年団が芝田さんの応援をしたの
は、西山のふもとのわら小屋に草焼きの火がうつった
ときのこと、事件はたいそうかんたんでした。しか
し、こんどの事件は、これはなかなかむずかしいので
す。いったい、どうしてそうさくをはじめたらいいで
しょう。

すると、富鉄さんとみてつという、大きい鼻のおじいさんが、
いいことを思い出してくれました。それはいまから四
十年くらいまえ、村の一文商あきないやが、坂谷さかたにまで油菓子
の仕入れにいった帰り、ろっかん「#「ろっかん」に

傍点」山のきつねにばかされて、まいごになったという事件でありました。そのとき、村の人びとは、かねやたいこを鳴らして、山や谷をさがして歩き、ついに、いずみだに

泉谷の泉の中で、ももひきを頭にかむつてがつがつふるえながら、「これはええ湯じゃ、ええかげんじゃ」といっている一文商いやを見つけ出すことができたのでありました。富鉄じいさんはこの話をよく知つていて、こまかく説明しましたが、それもそのはずで、きつねにばかされたのはじぶんのことだったのです。

富鉄さんの話を聞いてみれば、きつねにばかされるということも、ありそうに思えました。ろっかん山で

は、今でもよく、きつねのちらりと走りすぎるのが見られますし、村の中でだって、寒い冬の夜ふけには、むじなの声が聞けるのですから。また、たとい、きつねやむじなにばかされないにしても、よっている人間というものは、ばかされている人間とあまりちがわないというわけです。

そこでみんなは、鳴物なりものを持ってきました。かねはお寺でかりてきました。おそうしきの出る時刻を、知らせてまわるときにたたく、あのかねです。たいこは、夜番が「火の用心」といってはドンとたたく、あのねばけたような音のたいこです。もと吉野山参りの先達せんだつ

をなんべんもやった亀菊かめぎくさんは、ひさしぶりに鳴らし

てやろうというので、宝蔵倉ほうぞうぐらからほら貝をとり出して

きました。しかしひとふきふいてみて、おどろいたこ

ともうそのほら貝は、しゅうしゅうという音をたて

るばかりで、鳴りませんでした。「こりや、ひびがは

いっただかや」と亀菊さんはいいましたが、息子むすこの

亀徳かめとくさんがふいたら、そのほら貝はよい音で鳴ったの

です。そこで亀菊かめぎくさんは、じぶんが年をとったことが

よくわかりました。そして年をとることは、あほらし

いことである、と思ったのでありました。青年団の

ラッパ手林平りんぺいさんは、月の光でもピカピカ光るよい

ラツパを持つてきました。こいつなら三里ぐらいは聞こえるだろう、と林平さんは心のなかで得意でした。

そして男たちは、手に手にちようちんを持つて、山にはいつていきました。かねやたいこはたたかれ、ほら貝もふかれました。林平さんはラツパをどんなふしでふこうかまよいました。

しかし、きつねにばかされた人間と牛をさがすのに、こういうふしはどれもぴったりしないような気がしましたので、しまいには、ただ「プウツ、プウツ」とふしなしでふきました。すると、けなすことのすきな亀菊さんが「まるでゾウのおならみてえだ」といい

ましたので、林平さんは気をわるくしました。こんなことをいつても亀菊さんは、じつさいにゾウのおならを聞いたことなどありはしなかったのです。

みんなは、あちらこちらとさがしまわりましたが、同じ谷になんども下りたり、同じやぶになんどもはいったり、同じ池をなんどもめぐったりしました。これではまるで、じぶんたちがきつねにばかされているみたいだ、などと思いながら、みんなは十ぺんめにまた、同じ池をぐるりとまわりました。

もうだいぶんくたびれていて、ほら貝やラツパはもう鳴りませんでした。ときどきねぼけたような音でた

いこが鳴るだけでした。さてこんなにしてさがしました。和太郎さんと牛は見つからなかったのです。それどころか、みんなのうちに、ふたりの人が、どこかへはぐれていってしまったことがわかりました。いや、はやです。これでは、いつまでさがしていてもむだなばかりか、かえって損というものです。

もう、池の面が、^{おも}にぶく光っていました。そのとき、池のむこうのやぶで、年とったうぐいすがしずかに鳴きましたので、みんなは、やれ朝になったかと思いました。そこで村に帰りました。

村の人たちは夜つびてねなかつたうえに、山の中を歩きまわったので、たいへんくたびれて村に帰ってきました。そして、ひとまず駐在所の前にきたのですが、もう立っているのがものういので、道ばたの草をしいて、みんなすわってしまいました。

すると、西の方の学校のうら道を、牛車が一台やってきました。もう仕事にいくのかと、みんなはぼんやりした目で見ていました。

牛車が駐在所の前を通るとき、のっていた男が、

「おい、おまえら、朝早いのう。きようは道ぶしんでもするかえ」

といいました。

見たことのある男だと思って、みんながよく見ると、それが和太郎さんだったのです。

「なんだやい。おれたちア、おまえをさがして夜じゅう、山ん中を歩いておっただぞイ」

と、かめぎく亀菊さんがいいました。

「ほうかい。そいつアはご苦労だったのオ」

といって、和太郎さんは牛車から下りもせず、家の方についてしまいました。

「なんのことか」と、村びとたちはあいた口がふさがりませんでした。こんなことなら、大さわぎして山の中をさがしまわるなど、しなくてもよかったです。

これは、和太郎さんをみんなで、しかりつけてやらねばならないと、年より連中れんちゆうはいいました。それではないとくせになるから、というのでした。そこでみんなはねむい目をこすりながら、和太郎さんの家につめかけていきました。

和太郎さんは庭で、よぼよぼ牛をくびきからはずして、たらいに水をくんで飲ませていました。

「やい、和太」と村でりこうもんの次郎左エ門さんじろうざもん

がいいかけました。「おぬしは、村じゆうのもんくらい迷惑をかけたが、知つとるかや。おれたち、村のもんは、ゆうべひとねむりもせんで、山から谷から畑から野までかけずりまわって、おぬしをさがしたのだが、おぬしは、それに対してだまつておつてええだかや」

これでは次郎左エ門さんもそうさく隊にはいつていたようにきこえますが、ほんとうは、ついさつきまで家でねていたのです。

和太郎さんは、次郎左エ門さんのことばをきくと、びっくりしました。たいそう村の人たちにすまないとい

思いましたので、「そいつア、すまなかつたのオ」と十三べんもいつて、そのたびに頭をかいたり、背中せなかをかいたりしました。そして、牛もじぶんもよつてしまつたので、こんなことになつてしまつた、と説明しました。

村の人たちはいい人ばかりなので、じきに、腹がおさまりました。そこでこんどは、いろいろ和太郎さんにききはじめました。

「和太さん、それで、いままでどこをうろついていたダイ」

と、亀徳かめとくさんがききました。

和太郎さんは首をかしげて、

「どこだか、はつきりしねえだ。右へかたむいたり、左へかたむいたり、高いところにのぼったり、ひくいところに下りたりしたことをおぼえているだけなのオ」

と、こたえました。

「それで、無燈で歩いとったのか」

と、おまわりさんの芝田^{しばた}さんはききました。

「無燈じゃござえません。ここに小田原^{おだわら}ちようちんがつけてありますに、ごらんくだせエ」

といって、和太郎さんは牛車の下へ頭をつっこみまし

た。

ところが小田原ちようちんは、上半分しか残っていませんでした。どうやら、水でぬれたため、紙がやぶれて、コイルのようにまいてあつた骨がだらりとのび、それがとちゆうでなにかにひつかかつて、ちぎれてしまったらしいのです。

「水にぬれたので、こんなになつちめました」
と和太郎さんは、ちぎれて半分の小田原ちようちんをはずして見せました。

「そういえば、牛車も牛も、和太郎さんの着物も、ぐつしよりぬれているが、こりや夜つゆにしてはひど

すぎるようだ」と、だれかがいいました。

「ひよつとすると、どこかの池の中でも通つてきたのじゃねえか」

と、亀徳さんがいいました。

「まさか、そ、そんなことはありません」

と和太郎さんは、おかあさんがそばにいたので、あわててうちけしました。おかあさんに心配させたくなかったからです。

しかし、和太郎さんがいくらうちけしてもむだでありました。というのは、和太郎さんのふところから、大きなふなど、げんごろう虫と、かめの子が出てきた

からであります。こういうものは池にしかないものです。してみると和太郎さんの牛車は、どこかの池の中を通ってきたのです。

「この黄色い花はなんだろう」

とまた、だれかがいいました。見ると、よぼよぼ牛の前あしのつめのわれめに、黄色い花がひとふさ、はさまっておりました。

「れんぎょうの花ともちがうようだ。このへんじやいっこう見ねえ花だなア」

と、ひとりがいいました。

「そりや、えにしだの花だ。えにしだは、このへん

にやめつたにない。まアず、南の方へ四里ばかりいくと、ろつかん山のでつぺんに、このえにしだのむらがつてさくところがあるげな。そして、ろつかん山のきつねは、月のいい晩なんかそのかげで、胡弓こきゅうをひくまねなんかしとるげなが」

と、植木職人の安さんがいいました。

和太郎さんはしかたがないので、

「面目めんもくないけんが、どうやら、そこへもいったらしいて。ばかにりつばな座敷があつてのう、それが、たたみもふすまも天じようも、みんな黄色かつたてや。そういえば、耳のぴんと立った太夫たゆうがひとりござって、

こきゅう

胡弓をじょうずにひいてきかしてくれたてや。じゃ、あれが、きつねだったのかイ」

「それにしても、どうして、あんな急な山のとつぺんへ、牛車がのぼったもんだろう」

と、村びとはふしぎがりました。

「なにしろ申しわけねえだな、牛もおれもよっておつたで」

と、和太郎さんはあやまるのでした。

さておしまい、村びとたちにも、和太郎さんにもどうしてか、わけのわからぬことがひとつあったのです。

それは、牛車の上にひとつの小さい籠かごがのつていて、その中に、花たばと、まるまるふとった男の赤ん坊がはいっていたことです。

どこでどうして、この籠かごをのせられたのか和太郎さんはいくら思い出してみようとしても、むだ骨おりでありました。てんでおぼえがなかったのです。

「天からさずかったのじゃあるめえか」と亀徳かめとくさんがいいました。「和太さんが、日ごろから、子どもがほしい、女房にようぼうはいらんが、といっていたのを天でおききとどけになつて、さずけてくれたのじゃねえか」

和太郎さんは、亀徳さんがいいことをいつてくれた

ので、うれしそうな顔をしました。

しかし次郎じろう左エ門もんさんは、

「そんなりくつにあわぬ話が、いまだきあるもんじゃねえ。子どもには両親がなけりやならん」

といいました。

また、芝田しばたさんはひげをいじりながら、

「捨て子じやろう。一ぺんあとから駐在所へつれてこい。調査書を書いて本署にとどけるから」

といいました。

その後、和太郎さんは、赤ん坊の親たちがあらわれるのを待っていました。ついに、そんな人はあらわ

れませんでした。

そこで、その子には和助^{わすけ}という名をつけて、じぶんの子にしました。そして、一ぱいきげんのときにはいっつもでも、

「おらが和助は、天からさずかりものだ。おらと牛がよつぱらった晩^{ばん}に、天からさずけてくださったのだ」といいました。すると、りこうもんの次郎左エ門さんは、

「そんなりくつにあわん話がいまどきあるもんか。子どもにや両親がなきやならん。よつて歩いていううちに天から子どもをさずかるようなことなら、世の中

に法律はいらないことになる」

と、むずかしいりくつをいいました。

けれど、和太郎さんは負けていないで、こういうのでした。

「世の中は、りくつどおりにやいかねえよ。いろいろふしぎなことがあるもんさ」

さて、この天からさずかった子どもの和助君は、それからだんだん大きくなり、小学校では、わたしと同級で、和助君はいつも級長、わたしはいつもびりのほうでしたが、小学校がすむと、和助君は、和太郎さんのあとをついで、りっぱな牛飼いになりました。そし

て、いまでは和太郎さんは、だいぶんおじいさんになりましたが、まだ元気です。おかあさんとよぼよぼ牛は、一昨年なくなりました。

底本…「牛をつないだ椿の木」 角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1996（平成8）年6月20日34版発行

入力…山田芳美

校正…林 幸雄

ファイル作成…野口英司

2001年4月9日公開

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。